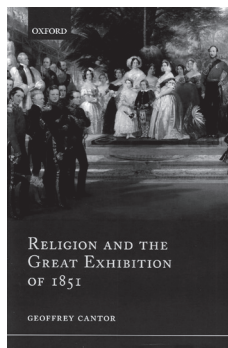


書評

Geoffrey Cantor, *Religion and the Great Exhibition of 1851* (Oxford: Oxford University Press, 2011)

田村 真奈美



1851年の万国博覧会といえば、進歩の時代であったヴィクトリア朝を象徴するイベントであり、現代まで続く技術革新と産業の発展の流れの中で捉える見方が一般的であろう。そのような中で万国博覧会を宗教の観点から見直そうとする本書は、奇をてらった研究のように思われるかもしれない。著者もそのように受け取られることを予期している(2)が、近年の研究で万国博覧会は「変幻自在なイベントであって、その意味は拡散し、主観的」(Jeffrey Auerbach, *Great Exhibition of 1851: A Nation on Display* (1999), 56)と見られるようになっており、本書の著者もそれを受けて、これまで顧みられることのなかった博覧会の宗教的側面を明らかにしようというのである。

もともとこの博覧会はあくまで世俗的な行事として計画されていたが、準備段階での最も豪華な行事であったロンドン市長主催の晩餐会(1850年3月21日)において、ゲストとして招かれたアルバート公の演説によりその宗教性が印象づけられることとなった(第2章)。アルバート公は、「人間の理性は神の姿に倣って造られたもので、神が創造物を統治する法を見つけるために人間はその理性を使わなければならない。そして、その法を自らの行動の規定とし、神の僕として、自然を克服しなければならない」と人類の進歩についての宗教的な見解を披露した。そう考えるならば、科学者も発明家も職人もみな「神の僕」であり、博覧会は宗教的枠組みの中に置くことができる。さらにアルバート公は、博覧会は人類の歴史の転換点であるとし、遂に「人類の調和の実現」がなされるであろうと述べた。この演説はグラッドストーンが「第5の福音書のように」と揶揄する

ほど宗教色が強かったようである。アルバート公に続いて、同じくゲストであったカンタベリー大主教のジョン・バード・サムナーが演説をし、国教会がアルバート公の計画を支持することを印象づけた。

こうして宗教的な意味づけとともに公になった博覧会の計画に対して、多くのクリスチャンは賛同したようである。しかしながら、博覧会の開催に反対する人々もいなかったわけではない。万国博覧会が開催されれば海外からも多くの見物客が来ることが予想される。当時のロンドンの人々にとって、世界中から来る大量の人々を迎えるのは初めての機会だった。(今年、そのロンドンで開催されたオリンピックを思うと感慨深い。)不安を抱くのも理解できる。懸念されたのは、外国人が病や革命思想を持ち込むのではないか、英国の道徳と信仰を損なうのではないか、ということだった(第1章)。特に反カトリック感情が高まっていた時期だけに、博覧会に乗じて大陸からローマ・カトリック信徒が流入し、イングランドのプロテスタントを征服しようとするのではないかという不安が宗教的出版物に繰り返し見られた。予想される外国人訪問者に脅威を感じていたのはどの宗派にも共通するが、なかでも国教会高教会派と福音主義者たちにその傾向が強かったという。また、1830年頃、福音主義者の中に「前千年王国説」を唱えるグループが現れたが、この極端な福音主義者たちは、万国博覧会の開催は人間の思い上がりであり、バベルに集まった人々の国や言語を分けた神の計画に反すると考え、博覧会を終末の予兆とみなして警告を発した。

しかしながら、宗教的な立場からの博覧会への反対意見はその多くが1850年後半から1851年初めに発表され、開会式の頃にはほぼ見られなくなっていた。1851年5月1日の開会式では、アルバート公、ヴィクトリア女王の挨拶に続いて、カンタベリー大主教の祈祷が行われた(第2章)。大主教は、世界に平和と知恵をもたらすのは人間の努力ではなく、神の恩恵であると強調した。博覧会の開催にこぎつけたのも神のおかげであった。そして、今後の成功を神に祈ったのである。この祈祷は、人類の知恵を集めたこの博覧会が決して世俗的な行事ではないことをクリスチャン(特に国教徒)に確信させるものとなった。この大主教の祈祷の背後にもアルバート公の努力があったという。そもそも開会式に宗教的な要素が含

まれることが決まったのは開会直前のことで、4月22日にアルバート公が大主教に手紙を書き、開会式での祈禱を依頼したのである。また、女王の挨拶も博覧会に宗教的な意味づけをするものだった。女王は神の加護を祈っただけでなく、芸術、科学、産業の進歩は神意によるものと述べたのである。

こうして開会された万国博覧会には、宗教団体もさまざまな形で参加した(第3章)。宗教小冊子協会(Religious Tract Society)と英国外国聖書協会(British and Foreign Bible Society, 以下BFBS)は水晶宮に展示スペースを確保し、数カ国語に翻訳された聖書やその他出版物を展示したのみならず、BFBSは水晶宮内で出版物を配布して布教活動も行ったという。しかし、どちらの団体もスムーズに展示にこぎつけたわけではなく、特に大きなスペースを要求したBFBSは実行委員会とかなり揉めたようである。実行委員会のメンバーはアルバート公とは違って、博覧会をあくまで世俗の行事と捉えており、芸術と工業製品の展示の場にBFBSの展示はふさわしくないという意見もあった。それに対して、BFBSは聖書の生産コストを1816年から62%減らしたとして、自らを革新的な出版社であると主張し、それゆえ「紙、印刷、製本」部門への展示は正当であると反論したのだった。また、この他にもさまざまな団体が、英国内外からの訪問者が参列できる礼拝を提供し、外国語の聖書を用意した。博覧会は布教の絶好の機会でもあった。

博覧会について宗教的な立場からの意見が集中したのが、建築物としての水晶宮、および「中世館」(Medieval Court)の展示についてである(第4章)。水晶宮に対しては好意的な反応が大部分であったが、国教会高教会派とカトリック教徒は中世の教会建築と照らして水晶宮を功利主義の建築と呼び、批判した。展示物の中で物議を醸したのは中世館のカトリック的な展示物であった。福音派の雑誌からはこれら展示物に違和感を感じていることがわかり、極端な福音派は反感を示している。ところで、この博覧会には異文化の工芸品なども展示されていたが、本来宗教的な意味があるものでも、文化的・宗教的コンテキストから外されて展示され、その意味は消されてしまっていた。キリスト教以外の宗教は見えなくされていたのである。

本書では万国博覧会に対する宗教的な反応を観ていく際に、宗教的マイノリティに対する目配りも忘れられてはいない。第6章では、カトリック教徒やユダヤ教徒の反応が取り上げられている。カトリック教徒は博覧会に批判的で、博覧会は「虚栄、利己的、不敬」(147)であり、現代のバビロンとされた。博覧会開催前の極端な福音主義者の見解と似ているが、カトリック教徒にとって博覧会はカトリシズムを減ぼそうとするプロテスタントの陰謀であった。英国は海外からの訪問者（特にカトリックの訪問者）の改宗を狙っていると考えられていたのである。他方、ユダヤ人は博覧会を支持し、称賛した。ユダヤ人エリートは計画段階から博覧会に関わっていたし、マイノリティであるユダヤ人は世界の平和と協調を目指す万国博覧会に期待したのである。

以上、内容をかいつまんで見て来たが、本書は開会前の準備から閉会までと多少時系列も意識しながら、博覧会に対するさまざまな宗教的見解を扱っている。国教徒、非国教徒だけでなく、カトリックやユダヤ教徒の反応も取り上げられているが、個々の反応はどの宗派の人物の意見であるかが（分かる限り）明記されてはいるものの、宗派で一括りにされることはない。一言でいえば本書のキーワードは多様性であろう。博覧会に付与された宗教的意味合いは多様であり、大まかに宗派で反応は分かれるものの、同じ宗派の中にも多様な反応があった。一方で、宗教的には両極端であるような人々（例えば国教会高教会派と極端な福音派）が表面上は似たような反応を示しているところもあって興味深い。

ところで、さまざまな宗教的反応を宗派による違いとともに提示している本書を理解するためには、1851年当時の英国の宗教をめぐる状況を把握しておく必要がある。本書は序章に「1851年の宗教の状況」というセクションを設けて、国教会と非国教の諸宗派にまたがる福音主義の隆盛、国教会高教会派の中から生じたオックスフォード運動、そしてローマ・カトリック教会への強い反感などを簡潔に説明している。本論に入ってから、必要に応じて補足説明が入るので、特別この時代の宗教的背景に通じていなくとも興味深く読むことができる。

それにしても本書を読んで驚いたのは、万国博覧会に言及した宗教的出版物の量である。著者自身、博覧会に対する同時代の人々の反応の中で宗

教的な問題が大きな位置を占めていたことを資料の多さが物語っている(3)と述べているが、それにしても改めて当時の出版物全体の中で宗教的出版物(雑誌、説教集、トラクト、聖職者の回顧録など)が占めていた割合の大きさを認識させられた。

最後に、現代の博覧会を1851年の万国博覧会からの延長線上に置き、1851年万博をその始点としてのみ見る態度について、著者が冒頭で述べていたことばが深く印象に残った。「われわれは、過去のできごとを単純に現代の前例として描き出す〔歴史の〕再構成に批判的であるべきである。」(1)自戒のことばとしたい。